

新型コロナウイルスが世界を大きく揺さぶっている。人類が体制や文化の違いを乗り越えて心を開き、協力してウイルスのコントロールに全力を挙げることができるか否かが問われている。

しかしメディアが伝える現実とは理想にほど遠い。国内では市民が検査体制や、学校閉鎖等に対する政府への不満を語り、識者は経済成長への悪影響を語る。SNSではデマや誹謗中傷が続く。マスクやトイレトペーパーのパニック買いが収まらない。

世界においても他国の入国禁止策の非難、データ操作による

新	時
美	評
術	術

近藤誠一

多様な生命体からなる複雑な生態系をつくってきた。環境の変化に適合できる種や個体が生き残り、そうでないものは絶滅した。この情け容赦ない淘汰によって、生命体を維持してきた。

しかし20万年前に登場した現生人類がこの状況を変えた。

# 地球は生きていくから美しい

事態の隠れいが密かに行われ、事実の解明の障害となっている。国際シンポジウムのテーマは、開かれて透明性のある民主主義体制がよいのか、独裁的中央集権体制の方が危機に対応しやすいのかといった点が中心だ。しかしそれでは問題の本質を押し寄せてないと言わざるを得ない。私はいつも行き詰まるとう、宇宙船に乗って地球を脱出している自分を想像する。そして多くの宇宙飛行士が初めて外から地球を見た時の第一印象として「地球は美しく」と言っていることを思い出す。

45億年前に生まれた地球は、38億年前に生命を宿し、次第に

定住化、農業・牧畜革命、産業革命、科学技術革命を経て自然に手を付け、食糧・エネルギーの増産によって人口を急増させ、国家をつくり、民主主義という統治の制度をつくった。あたかも自然の生態系から自由な、独自の人間世界をつくったかに見えた。現にこの世界は、人間の頭の中にしか存在せず、宇宙船から見るとはできない。

しかしその科学技術力によって自然を破壊した。多くの種を絶滅に追い込み、ついに温暖化による異常気象を招くこととなった。それでもおぼろげに言わざるを得ない対策しかとらず、性懲りもなく自然を破壊し続け

ている、そんな人類へのリマインダーが、今回の新型コロナウイルスによる感染の広がりととるべきなのだ。ウイルスは生命誕生以来生態系を支えてきた、生物界の大先輩なのだ。

バベルの塔で人間の思い上がりに警告を与えた神が、一向に愚行を止めない人間に新たな試練を与え、メッセージを送っているのかも知れない。原爆や恐るべきサイバー戦争に至らぬうちに人類を救う（人類が心を改めて本来の行動をとる）最後のチャンスかも知れない。

やるべきことは、人間世界の中でのいがみ合いから離れ、自然との融合を図ることである。

文明は維持しつつも、生態系への負荷を最少にするよう十分な配慮をしなければならぬ。それは日本人にとって難しいことではない。日本の文化の基本は自然からきている。素材も色も自然からもらい、自然に返す。その美意識は自然そのものだ。究極の美とは、華々しい人工的な色彩や形によって表現されるものではない。自然の生態系が有する多様性とバランスを尊重することで、生き物が半永久的に共存共栄できる環境こそが美しいのだ。宇宙船から見える地球が美しいのは、自然が生態系によって生きていくからなのだ。

(近藤文化・外交研究所代表)